

【つぐ minä perhonen 会場構成】

各写真は、東京会場での展示です。 Photo: Manami Takahashi

chorus

ミナ ペルホネンは、テキスタイルからものづくりを始めるブランドです。ブランドの活動当初から、洋服をフォルムからデザインするのではなく、布地から作りはじめるという姿勢を貫いてきました。そしてこれまでにデザインされたテキスタイルの図案は、1000 種を越えます。chorus では、その中からおよそ 180 種類のテキスタイルが並びます。ひとつの柄から別の柄へ、またさらに次の柄へとアイデアが展開しデザインが派生していく様子や、ひとつのデザインがワンシーズンのみでなく、時を超え、少しずつ姿を変えて受け継がれていく様子が感じられます。



score

ミナ ペルホネンの活動の基盤にあるテキスタイルは、デザイナーの構想とスケッチからはじまり、デザインを練りながら、そのつど試作を繰り返し、多くの人の手や工程を経て、生産へとたどり着きます。そこから初めて、さまざまな洋服やファッションアイテム、さらには暮らしを彩る道具たちが、生まれていくのです。score では、ミナ ペルホネンのアーカイブから選ばれた 21 柄のデザインの成り立ちと、それぞれのテキスタイルから多様なアイテムが生まれていく過程を紹介します。



humming

東京にあるミナ ペルホネンのアトリエでは、日々、新たなデザインや企画が生まれます。妥協のないデザインの現場。そこは集中して作業に取り組む場所であり、多くの人との対話が行き交う場所でもあります。それぞれの手作業の音や、打合せを重ねるスタッフのやりとりなどが響きあうアトリエの制作風景。デザイナー・皆川 明と田中景子のデスクが並ぶアトリエを再現した humming では、その日常を彩るアイテムや、日々の制作に使われている画材などを通して、豊かな創造の場にながれる空気を感じることができるでしょう。



ensemble

刺繍、プリント、織。ミナ ペルホネンのテキスタイルづくりの中心にある3つの技術は、それぞれブランドと深い信頼関係を結ぶ国内の工場が担っています。そこでは、デザイナーが手作業で描いた図案を工場の職人が読み解き、デザイナーとの対話と試行錯誤を幾度も重ね、技術を駆使してかたちにしていきます。機械と手仕事の調和により、わずかな線のゆらぎや、微妙な色彩の重なりなど、ミナ ペルホネンのデザインの魅力が再現される様子をご紹介します。



voice

1995 年に創設者の皆川 明が「せめて 100 年つづくブランドに」と願ってはじめてミナ ペルホネン。そのブランドの代表のボタンは、2021 年に、それまで長いあいだ仕事を共にしてきたデザイナーの田中景子に渡されました。ふたりにとって、「つぐ」と題したこの展覧会の意味とは、そしてミナ ペルホネンのこれまでを創りあげ、これからを紡いでいくこととは。それぞれの想いが語られます。さらにはミナ ペルホネンの協業先や、親交のある方々へのインタビューを通して、それぞれの視点から「つぐ」の意味を探っていきます。



remix

着る人にとって「特別な日常服」となる一着を、たゆみなく作り続けてきたミナ ペルホネン。シーズンごとに発表される新作テキスタイルは、ワンシーズン限りではなく、その後も繰り返し用いられ、新たなアイテムとして生まれ変わります。使い捨てるのではなく、循環を生むデザインを体現するミナ ペルホネンは、ブランド創設当初から、修繕やお直しを行ってきました。本展では、その仕事をさらに発展させる試みとして、時間を経て修繕が必要になった服に、新たなデザインを加えたリメイクを行う、公募制のプロジェクトを実施しました。大切な一着が、この世にたったひとつのユニークピースとなる、ミナ ペルホネンならではのリメイクのあり方が提示されています。

